

2.

尾瀬の秋 紅葉の尾瀬ヶ原 縦走

上越側登山口 鳩待峠 会津側登山口 御池小屋



1999.10.16. oze.htm by M. Nakanishi

『夏の尾瀬を!!』が『秋の尾瀬を!!』に変わり、中々行けなかった紅葉の尾瀬ヶ原縦走を一日楽しんだ。

夏の緑と水芭蕉の尾瀬とは違った褐色にどこまでも広がる静かな尾瀬 もうひとつの尾瀬を楽しむことが出来た。

30年の時代の流れを感じた尾瀬周辺であるが、尾瀬ヶ原の木道から見る景色、コウゴウと流れ落ちる三条・平滑の滝。そして キャンプした桧枝岐の河原や桧枝岐の六地藏などもう道や周りは変化してよく覚えていないが、その地点だけは昔のまま。そこに立つと色々なことが次々と思い出され、時を飛び越えてしまう。

一人旅 きままに自然の良さを感じるひとときであった。

『赤田代』や温泉小屋周辺の湿原の泥が赤茶けているのが燧ヶ岳から流れ出る水に含まれる鉄分のためであること始めて知った。

会津では『たたら』の痕跡を聞いたことがなかったが、ここにも『鉄』の痕跡があった。

会津滝の原 今は会津高原駅。バスをおり、すぐそばの『会津高原温泉 夢の湯』浸かって今回の尾瀬縦走の場面場面を思い出し、長かった一日を振り返って帰路についた。

'99.10.16. 尾瀬からの帰途

真っ暗な中を走る野岩・東武電車の中で

スタート 上越側登山口 鳩待峠へ

尾瀬に行こうと幾度と無く準備したが、行こうと思う時はいつも雨。

もう今週が秋 気楽に行ける最後のチャンス。今回も秋雨前線が停滞している。前日も霧雨で夜行電車で行くのをあきらめ、早朝 行ける所まで沼田から行く事にした。

朝5時に起きたが、まだ 霧雨が残っている。6時48分上野発の新幹線に飛び乗る。上毛高原8時着。

ラッキーなことに曇っているが雨はやんで空が明るい。



尾瀬ヶ原 概略図



尾瀬ヶ原への車窓から

しかし、やっぱり尾瀬へ行くバスはなし。一時間待ち。

「8時15分沼田駅発大清水行のバスに間に合うか?」とにかく沼田駅へタクシーを飛ばす。これまた、ラッキーなことに駅前の信号で止まっているバスを見つけ、ドアを叩いて乗せてもらう。

どうやら、会津側まで一日で尾瀬ヶ原を縦断して、桧枝岐へ抜けられる目途がたった。

戸倉でバスを乗換えて鳩待峠に向かう。もうシーズン最後で天気もぐずっていることもあってバスに乗っている人も少ない。

登るほどに山の紅葉が鮮やかになって行く。

今日は至仏山も燧岳もガスで登っても何も見えないだろう。仕方なし。

尾瀬ヶ原をゆっくり歩いて、ヨッピー川・三条の滝へ出て、御池小屋へ行く事にした。

30年前テントを張ったあの幻想的な桧枝岐の村は残っているだろうか?

良ければ 桧枝岐村か木賊温泉で泊まってもよし。

「鳩待峠から御池小屋への尾瀬原縦走」そして桧枝岐村へ。一日の工程が出来あがった。

紅葉の中を約30分ほど走って 鳩待峠に到着した。

鳩待峠 山鼻へ



【 鳩 待 峠 で 】



鳩待峠の駐車場には車が一杯。

昨日から車で来て尾瀬へ入った人が多いのだろう。バスに乗った人は少なかったが、さすがに人が多い。

至仏山はガスの中。まっすぐ尾瀬ヶ原へ下って行くことにした。

尾瀬へ下る道の入り口から二条の木道が林の中を尾瀬ヶ原に向かってまっすぐ続いている。

今年の秋は暖かいので、真っ赤ではないが赤・黄色に色づいて美しい。

このあたりには松の木々が多く松の緑とのコントラストが美しい。





木道に落葉が落ちて急ぐとつるつる滑る。
 多くのグループが、中高年の一団で、カラフルな服装が決まっている。
 中に入りこんで歩くと何か違和感。周りの山の紅葉の写真を撮りながら山鼻へ。



【尾瀬ヶ原の西端 山鼻付近】

山鼻

尾瀬ヶ原

牛首



牛首

東電小屋

ヨッピー川

赤田代



赤田代



このあたりの湿原は燧ヶ岳の雪解け時に鉄分を豊富に含んだ土が水と一緒に流れ込み、湿原は赤い色をしており、赤田代と呼ばれる。このあたりで初めて知る鉄の痕跡である。



温泉小屋

ヨッピー川沿い

平滑の滝



裏燧ヶ岳

横田代

御池小屋登山口



御池小屋登山口

檜枝岐

会津高原駅 帰路へ

4時きっちりに霧の中の御池小屋登山口に着いた。



非常に冷たい霧雨。尾瀬ヶ原では曇天であったが、秋の尾瀬ヶ原が満喫できた。

この紅葉の時期に尾瀬へ行ったのは初めてであったが、人の多い尾瀬沼への道を避けたこともあって、水芭蕉と緑と水が至る所であふれている夏の尾瀬とは全く違った落ち着いた静かな秋の尾瀬が満喫できた。切符まで買って楽しみにしていた家内をやっぱり連れてきて

やれば良かった。来年は是非に。

あとは気ままな一人旅。沼山峠から降りてくるバスを待つが、霧の中、寒くて震えた。

尾瀬ヶ原から尾瀬沼 沼山峠に出る人が多く、バスは満員。

会津側桧枝岐川沿いをどんどんバスが下って行くが、ナナカマドの赤がスゴイ。

会津側の紅葉の方が上越側よりはるかに鮮やかである。寒い証拠で思いがけないおまけ。

紅葉の中をどんどん下って七入・大津岐 そして 桧枝岐の村へ。

桧 枝 岐 村



街道の両側に続く家並みがイメージしていたのと違う。頭に描いていた 30 年前の桧枝岐の村の様子と全く違う。

以前来た時には、道の両側にわらぶきの家並がつづき、家の前には防火用水とバケツが並び、何軒かごとに家の横街道に沿って墓が立っていた。砂利道の街道がひっそりと通っていいかにも『秘境落人伝説の村』の感があったが、今はもうわらぶきの家は一軒も見当たらぬ。

あの道の両側にあった防火用水もなし。綺麗に整備した墓が街道を見守っていた……。

福島県南会津」より

バスが民宿の家並みを通り過ぎて行く中に所々に墓が見えるが全くイメージが異なる。

街の中心部にはいい、あの良く雑誌に載っていた『赤い帽子を着た六地藏』が見える。

これだけは昔のままである。

満員の人が殆ど桧枝岐で下車。おそらく明日 桧枝岐から会津駒ヶ岳へ登るのだらう。

私は降りるのを止めた。昔のあの幻想的な家並みの印象が強く今回はバス。

考えてみれば無理もない。

通りぬけられなかった奥会津のドンツキが御池小屋を通過して銀山湖 沼田・上越へと道が開通。

また 奥会津の中心会津田島からは東京への鉄道が開通し、秘境であった湯西川・鬼怒川・日光を通り東京へ3時間弱で直結している。もう 秘境など存在しないことを実感した。

約1時間ちょっとで 会津滝の原 今は会津高原駅に到着。すっかり 日が落ちて真っ暗になってた。

バスをおり、すぐそばの『会津高原温泉 夢の湯』に浸かって今回の尾瀬縦走の場面場面を思い出し、長かった一日を振り返って 帰路についた。

確か 司馬遼太郎も『街道を行く』で、桧枝岐に入り、その街の強烈な印象を書いた文があったはず。帰って読み返してみたい。



'99. 10. 16. 尾瀬からの帰途

真っ暗な中を走る野岩・東武電車の中で